

第4章

トルコにおける山賊（義賊）と英雄と聖者

—— トルコの小説から ——

はじめに

トルコの大河小説、ヤシャール・ケマル『瘦せたメフメット』全4巻は、新聞に断続的に発表された小説であり、その完成に1955～86年のほぼ30年間を要した⁽¹⁾。この小説によってヤシャール・ケマル（1922年生まれ）の名前は、ノーベル賞候補作家として世界に広まり、現存する最高のトルコ人作家という評価を確立した。

第1巻、『メフメット、私の鷹』（1958年出版『瘦せたメフメット』、61年英訳）では、主人公「瘦せたメフメット」は、まだ10代の少年であった。ひび割れた土地にアザミのように根を深く張って生きて行かねばならない貧しい少年であった。地主の虐待に反抗するメフメットは、山賊（義賊）となり、不正を嫌い、一緒に駆落ちした娘を死にやった地主を殺す。褐色の不思議な馬に乗ったメフメットは、町の広場で母の来るのを待って「母さん、さよなら」と言い、アルダーの山に駿馬を矢のように走らせるのである。

第2巻、『アザミを燃やして』（1969年出版『瘦せたメフメット2』、72年英訳）は、人々の土地の収奪をはかり、地方の政界と絡んだ大地主を殺す（本稿）。

第3巻、『瘦せたメフメット3』（1984年出版）は、正義の人にしか見えず、また正義の人にしか会わない、部族の老婆から魔法の指輪を譲り受け、その

力によっていくつもの苦境を脱していく。羊飼いや宗教指導者ホッジャに助けられ、あるいは白い布をまとった聖霊（実は村の女たち）やこの不思議な駿馬に助けられて、地方都市で政治家と組んだ悪徳地主を殺すのである。

また、第4巻、『瘦せたメフメット4』では、魔法の指輪の力で大蛇がいる沼地を抜け出す。その後、自分が地主一人を殺しても別の地主は残るのであり、義賊に将来はないと義賊を止めて富豪と称して妻と生活を始めた。1万人のメフメットを育てることの方が大切であるというわけである。しかし、以前の仲間のホッジャが理想社会を求めて死んだと聞き、また、正義を求めて各地で次々と現れるメフメットを有力者が軍隊の力で抑えていくのを聞いて、トルコ東南部のアナバルザ地域の悪の親玉を殺すのである。そして、広場でまた母を待ち、義賊を止めなかったと伝えてアルダーの山に駿馬を走らせて、一瞬のうちに人々の視界から姿を消したのである。

第2巻、『アザミを燃やして』が扱うトルコ共和国建設（1923年）の直後に、トルコ東南部の農村に展開した社会変容と社会運動から、1980年代の開発主義・国家建設下におけるトルコの社会変容と文化変容をすぐには類推することはもちろん許されない。しかしながら、トルコ人小説家の作品を通じて20年代にトルコに生じた諸変容の「原型」を整理し、変容するトルコ社会と文化を知る上で役立つ、いくつかの定式を抽出してみたい。

トルコ東南部、アダナ地方に広がるチュクロバ平野やアナバルザ平野（本書では「アザミの平野」）には、「アザミ焼き」の民俗行事がある。「アザミの平野」に人々が集まり、アザミを盛大に焼く。「アザミの平野」には、大嵐のような火が三日三晩燃え続け、燃えるアザミの音がこの平野一帯に広がる。大嵐のような火のために近くのアラダーの山頂は、夜でも昼と変わらないほど明るいという。

ヤシャール・ケマルはこの民俗行事「アザミ焼き」を、言いかえれば、トルコの「民衆文化」をこの小説の主要なモチーフにしている。ヤシャール・ケマルが取り上げたアザミは、春には緑の若葉を出すのが、徐々にその幹は黒色で鉄のように固くなる。しかも長く絡み合った根のためにアザミは頑強に

その土地に固着する。それゆえ、アザミは祖先から受け継いできた土地に執着する農民の姿を象徴する。

また、ヤシャール・ケマルは、主人公の「痩せたメフメット」の将来を暗示させる「褐色の駿馬」を登場させる。「褐色の駿馬」は、トルコ東部のアナトリア地方に住み始めた（14世紀以降）トルコマン族、ひいてはトルコ人が備える民族の理想、あるいは、誇るべき伝統を象徴する。現在の右派政党、正道党（1983年結党、デミレルの指導）も、党のシンボル・マークに馬と人を用いているとおりでである。さらにヤシャール・ケマルは、鷹を登場させる。また、「わたしの鷹」とは、農民の守護者、あるいは、半ば聖者と化した主人公「痩せたメフメット」のことである。このように小説は、3つの象徴、アザミ、駿馬、鷹を軸に展開する。

第1節 トルコにおける山賊と義賊

(1) トルコにおける山賊（義賊）について

第1章で述べたように、山賊（義賊）はトルコに限られたものでなく、広く世界的に存在している。「社会秩序、逸脱、英雄主義、抵抗」に関し、特に、なんらかの社会的な意味を有している民話を通して、英雄伝説（山賊、義賊）の回りに成立していた社会環境を想定することが可能である。本稿で取り上げる「痩せたメフメット」は、第1章で述べたように、5つの型が認められる山賊（義賊）のうち¹²⁾、盗賊（義賊、山賊）の第1型「自助的な辺境の居住者」に該当する。国家権力の相対的に希薄な領域に身をおいて国家建設と開発の中で生じる不正に挑戦する「痩せたメフメット」を通して、変容するトルコ社会と文化を知り、特に「英雄」としての山賊（義賊）とその聖者化に関わるトルコ民衆の社会意識を、規範レベルと（実態の）認知レベルで知ることができる。

本稿で扱う第2巻は約400ページにおよび、55章に分かれる。章ごとのタイ

トルも大きくまとめたタイトルもないので、ここではこの小説を2編に分ける。また、変容するトルコ社会と文化、さらには社会運動に関する定式作成に関心があるために、適宜簡単なタイトルをつけ、時には小説の記述順序を崩すこともある。

(2) 「褐色の駿馬」と土地篡奪者たち

「褐色の駿馬」は、アナバルザ平野の中央で動こうとしない。その影は、アナバルザの砦⁽³⁾のある突き出した大きな石の方に延びている。この「駿馬」を殺すように命じられた一人の男が、銃の引金を引く前に、その駿馬はいつも姿を消してしまう。「馬の姿をしたジン、聖霊ではないか」と男は不思議がる。

アナバルザ平野の南にはヘミト山からジェイハン川(地図参照)が流れ、その土地は年に3度も収穫できる「黄金」の土地である。アナバルザ平野の上手には、この小説の舞台であるバイバイ村がある。バイバイ村は比較的大きな村であり、この村を手に入れば他の4つの村もその人のものになるとみなされた重要な村である。

(イ) アリ・サファ・ベイー土地篡奪者1

アリ・サファ・ベイはトルコマン族の族長であり、ちょうど一年前にトルコ東南部のウルフア(シリア国境に近い町、現在人口19万5000人)の友人から「駿馬」を受け取った。チュクロバ平野などの地域から多くの人が駿馬を眺めに来たので、大いに満足していた。しかし、トルコマン族に特有な馬に対する素朴な喜びも、土地に対する欲望には勝てなかった。なかでも、アナバルザ平野の「肥沃な黒い土地」が欲しかった。バイバイ村の土地をとにかく手に入れば、その後で徐々に所有地を拡大できる(例えば、5万ドナムまで=4700ヘクタール)と考えていた。今日、1980年には100ヘクタール以上所有の農家は全国で6180戸に限られることから、5万ドナムの広さが推定できる。

アリ・サファ・ベイは、「5万ドナムの土地」を手に入れるための最初の土地(17ドナム)を、バイバイ村に住むヨバゾグル・ハッサンから得ようとして

この土地の代価として何かを提供したいと申しでた。するとハッサンは「褐色の駿馬」が欲しいと答えた。厚かましいこの答えを結局拒否できずに、駿馬を与えざるをえなかった。アリ・サファ・ベイは、彼を憎んだ。しかも、土地と交換に「愚かい者」からこの駿馬を手に入れたと吹聴されては、アリ・サファ・ベイは自分の威厳を守るために駿馬を殺し、彼を罰せざるをえないと考えた。手下に彼の家に放火させ、駿馬も焼死させるように命じた。火事にもかかわらず褐色の駿馬は死なないうちで、どこかに逃走した。このことを知ると、手下の一人に駿馬を殺すように命じ、殺さないうちは村に帰るなと命令した。

アリ・サファ・ベイは、別の村に家屋と畑を提供する（後述）と申し出て、ハッサンをバイバイ村から追い出し彼の土地を手に入れた。この取引にハッサンが同意したのは、自宅放火の重罪人として警察に逮捕され、拷問を受けたためである。こう差し向けたのはもちろん、アリ・サファ・ベイであった。ハッサンの父は、クルド族の「英雄」であり、クズルバシュ（本来は神秘主義教団の戦士）の一員であった⁽⁴⁾。彼自身も「勇敢で独立心に富み、純粋な心」を持つ男であった。アリ・サファ・ベイと警察の力の前に、不毛な土地に移らざるをえなかった。後に、バイバイ村の有力者二人が追い出されたナルリキシュラ村に来て、「こんな土地に居たら餓死してしまう」と言うほど「不毛な土地」であった。たとえ死ぬにしても「自分の親族」がいる土地で過ごすべきであると二人が説得したが、アリ・サファ・ベイと警察を恐れてハッサンは「村には戻らなかった」。

(ロ) 「はげのハムザ」—土地篡奪者2

背が高く首は細く、そして力の強い「はげのハムザ」は、主人公メフメットが4年前に殺した地主、アブデ・アーガーの弟である。兄の生存中は村に来ると捕らえられ、三日三晩殴られた。しかし、兄の死後2年ほどして、馬に乗った一団を連れコログル村（後述、メフメットの項参照）にやってきた。おまえたちはこの2年間、地主への税を支払わないで耕作したから、今後3年間は「おまえたちの家にあるもの全てを没収する」と言い残した。

(ハ) アリフ・サイム・ベイー土地篡奪者3

アリフ・サイム・ベイは30歳に満たないが大きな男で、ケマル・アタチュルクの右腕といわれる。トルコ東南部のコザン（地図参照，現在人口5万人）選出の議員であり，高等裁判所の裁判官も兼ねる。彼は，トルコの東部ビンギョル州（クルド人居住地区であり，クルド人は中東最大のマイノリティでトルコに約23%，850万人，クルド側の発表した人口。11%とも言われる）の出身で，「貧しいクルド族の息子であった」⁽⁶⁾。鉄砲いじりが好きというだけの理由で「軍事アカデミー」に入学した。卒業後，祖国解放戦争では南部戦線で戦果をあげ，その功績によって議員に選出されたのだった。以前，スルタンや族長，あるいはエジプト人やアルメニア人が所有していたチュクロバ平原（綿作によりトルコで最も発展した農業地域）の土地の一部を，彼は入手したかったのである。

アリフ・サイム・ベイは農業専門家を連れ，チュクロバ地方で1台しかない自動車走らせ，最も良い「黄金の土地」をここで入手しようと狙っていた。収穫量が播種量の50倍（平均で10～15倍，劣等地で2～5倍）になると農業専門家が勧めた土地は，トルコマン族の族長であったアフオジャ家が以前に所有し，今では馬泥棒を職とするトルコマン族のセリーム・ベイが所有していた。以前はアルメニア人の所有地であったがその後没収された国有地をアリフ・サイム・ベイは他に誰も参加しない競売で買い取り，その回りに柵を巡らし，セリーム・ベイの土地も柵の中に入れた。この措置に不安を感じた地域の長老が，旧家の出身で与党人民党（1923年結党，24年共和人民党に改名）を通して書記長に話をつけたから，セリーム・ベイの所有地篡奪計画は未遂に終わった。

アリフ・サイム・ベイが次に狙った土地は，アナバルザ平野を流れるジェイハン川（地図参照）の南岸にあるアクメザル（白い墓地）村であった。この村は，オスマントルコ時代に現ソ連領コーカサスからきたトルコマン族の一つチェチェン族が居住する村であった。この村のトルコマン人の中には，トルコ共和国建国時に追放されたアルメニア人から，友情関係に基づいて買い

取った土地を所有する者がいた。アリフ・サイム・ベイは、そうした一人から2000～3000ドナム（190～280ヘクタール）の土地を買い上げた。だが、祖国解放戦争（1914～22年）の「国民的な英雄」である彼は、これくらいの土地所有では満足しなかった。アクメザル村の住民全部から土地を篡奪し、彼らは古くからの職業である馬泥棒をまた始めればよい、そう考えていた。

アリフ・サイム・ベイは自分の野心を実現するために、2つの計画を進めた。一方で、以前からの知り合いであるトルコマン族の族長アームル・アーガーに約100頭の馬を用意させた。アームル・アーガーは、トルコ共和国の建国後にもその経験豊かな馬泥棒336人を抱え、そのもとにそれぞれ若干名の助手がいたから、総勢約1500人ほどの馬泥棒集団（第1章で述べた分類で言えば、職業的な地下組織であり、犯罪を抵抗の行為としてではなくて、生活の手段となす専門的な地下組織）を抱えていた。アームル・アーガーを通じて馬を集めると、土地の代わりに馬を1～2頭ずつ与え、着々とアクメザル村の土地を手に入れていった。

他方で、アクメザル村に住むイドリス・ベイを尋ね、彼に土地を譲れと要求した。イドリス・ベイは30歳前後で痩せており「背は高く、黄金の美しい目と長い指」をもつ。また、彼の父はアクメザル村に住むチェチェン族の族長であった。譲れとの申し出に対して、イドリス・ベイは頑固として土地を手放さなかった。

トルコマン族の長である、「30歳の若者でトルコ語も知らない」シルカシアン（コーカサスから来た者）の奴がこの私にたてついたと、アリフ・サイム・ベイは憤慨した⁶⁾。アリフ・サイム・ベイは、アクメザル村の有力者を個別に呼んで、「売って金を受け取るか」、土地を売らずに「棍棒で殴られたいか」と迫った。また、イドリス・ベイの土地へ働きに行こうとする農民を、手下に殺させた。しかし、殺人罪で逮捕された手下も、わずか3カ月の獄中生活で釈放された。いがみ合いは、2年ほど続いたのである。

アリフ・サイム・ベイは、この他にも「裁判所の書記」を使って、150万リラの借用書を作成し、イドリス・ベイに送りつけた。また、イドリス・ベイ

と不仲だった男が殺されると、その男の死体がイドリス・ベイの土地で発見され、イドリス・ベイは殺人犯として逮捕された。彼は脱獄したが、それはアリフ・サイム・ベイの思いつきであった。脱獄者は裁判所に出頭できないから、借金の支払いと懲役25年の実刑判決が、彼不在の裁判所で下された。イドリス・ベイは怒って、裁判所に放火した。その後は、山中に逃げ、山賊になったのである。

第2節 土地篡奪過程と聖者メフメット

(1) 聖者メフメット伝説の発生

主人公、「瘦せたメフメット」は30歳前後の若者で、トルコ地中海地域タウラス山地(地図参照)のコログル村の出身者である。コログル村の地主アブドル・アーガーを4年前に殺したために、彼は山賊として山中に留まらざるをえず、故郷には戻れない。メフメットは警察に追われながらも、いつも「暖かで親しみのある、優しい母の手」、「友の手でも姉の手でもある」母の手のもとに戻りたかった。「恐怖と絶望」が襲ってくるなかで、何よりも「もう一度生まれた村が見たかった」。

鷹と呼ばれる主人公、メフメットがアブドル・アーガーを殺した時に、コログル村だけでなく「アザミの平野」にある他の4つの村からも人がきて、盛大に「アザミ」を燃やした⁽⁷⁾。それを思い起こしながらも、タウラス地方の地主を殺した自分に、タウラス山地と関係のないチュクロバ地方の地主がなぜこれほど敵意を示すのか、その理由が分からなかった。この小説の冒頭でも、兵隊や、木や石、あるいは銃を持った農民が「瘦せたメフメット」を山狩りしていたとおりである(『アザミを燃やして』、第2章参照)。山狩りのために主人公メフメットは山中にいられなくなり、老オスマンが住む、小説の主舞台であるバイバイ村に身を隠そうとした。ここから『瘦せたメフメット』第2巻、『アザミを燃やして』は始まるのである。

バイバイ村へ2時間ほどのところにある、「黄色いウムメット」の家に途中立ち寄ったが、彼は恐れていた。しかし、バイバイ村では老オスマン夫婦が「私の鷹」と言って歓迎してくれた。老オスマンの家に姿を隠していたとき、すでに述べた、(ロ)ハッサンの家に火がつけられて、(イ)アリ・サファ・ベイの送った一団がバイバイ村を襲撃した。老オスマンは、メフメットにまだ今はおまえの出るときでないと抑えたが、(イ)アリ・サファ・ベイの土地襲奪計画は次々と実行されていた。「これ以上誰かの家がこわされたら、誰もこの村に残らなくなる」ほど、バイバイ村の状況は緊迫した。

すでにバイバイ村の住民の半分は村を捨てて、不毛の土地の石切り場であるサリチャム村に移った。サリチャム村に行った人に村に帰ることを説得しに行った老オスマンも、村に「瘦せたメフメット」がいることを明らかにすることはできなかった。それゆえ、「世界は預言者ヒドルの手中にあり、我が家には預言者ヒドルがいる」といって（ユダヤ教における預言者エリヤ〔前9世紀〕と同じ救世主で、コーランにも記され、トルコの民衆宗教においてはたびたび現れる)⁽⁶⁾、村に戻るように説いた。また、老オスマンに同行した宗教指導者ホッジャも「臆病者は神の庇護を得られない」と、コーランの言葉を引用した。そして、「人間は自分の土地に戻らなければならない」。しかし、村を去った人々は村に「瘦せたメフメット」でも現れない限り、村には戻らないと答えるのであった。

メフメットも、自分が老オスマンの家に隠れていることがいずれ村人に伝わり、警察に捕まると考えた。逮捕されるならば、それ以前に一度故郷がみたいと、老オスマンの家を出ることになった。途中でまた「黄色いウムメット」の家で、警察と「黒いイブラヒム」の一団が彼を追跡しており、故郷のクロゴル村にはこの2カ月間警官が張りついていることを知らされた。「黒いイブラヒム」は、かつてこの地方で最も有名な馬泥棒であったが、後に許されて町に住むことが可能になった。しかし、その代わりに地主に対立する人を捕える義務を負わされ、こうした活動によって生計をたてていた。メフメットは、警察と「黒いイブラヒム」の一団の活発な活動に絶望しながら、故

郷の村にたどり着いた。

夜中にやっと自分の家に潜り込み、「フェル母さん」から村のことをいろいろ聞いた。朝になると、彼は酔ったような足取りで「アザミの平野」に降りて行った。「母さん」がやっとメフメットの居場所を思いついてやってくるまで、朝から昼までずっとアザミの間に立っていたのである。「母さん」が来ると、昔の友人である「びっこのアリ」を呼んで欲しいと頼んだ。(ロ)ハゲのハムザ(前述)の手下になったあの「不信者」に会いたいのかと言いながら、母さんは彼を呼びに行った。

「痩せたメフメット」は自分の身に迫る危険を感じた。以前「アザミを燃やして」村人たちが踊った様子を思い起こしながら(前述, 128ページ)、銃を肩に谷の頂上にある突き出た岩を目指して登り始めた。頂上についた頃に、下から警察の射撃が始まった。彼は夜までは警察を遠ざけておくため、銃撃戦に有利な岩に陣取った。「私のメフメットに手を出さないで」と、「母さん」は弾が飛んでくるのも気にせず彼の所までやってきた。銃撃戦の中で、警察の隊長は「メフメットは山賊なんかではなく、ジン、聖霊」であり、「聖者に違いない」⁽⁹⁾と呟く。その隊長が、「命は助けるから降伏せよ」とメフメットを説得に登ってきた。「私にはもう一つやるべき仕事が残っている。それ以上近づけば撃つことになる」と、メフメットは苦しげに叫んだ。結局、この交渉は成立せず、メフメットはもっと足場のよい場所に移り、銃撃戦が始まった。

夜になると、メフメットの銃の銃倉が空になり、腕にも感覚がなくなったし、手も怪我をした。そんなとき、少し離れたところから警察をめがけて射撃が始まった。警察の中にいた以前からの友人「びっこのアリ」が岩影から射撃を開始したのだった。アリが応戦している夜の間に、メフメットは谷を降りた。逮捕されれば殺されるのに、「唇に不思議な、そして狂気じみた笑いを浮かべて」応戦していたアリのことを、メフメットは思っていた。夜中ずっと続くメフメットの応戦を見て隊長は、夜に逃げないメフメットを不思議がった。翌朝早く、「びっこのアリ」は射撃をやめ、なに食わぬ顔で警官の

間に紛れ込んだ。応戦もやんだ朝、谷にはメフメットの姿が全然見えないため、「メフメットは聖者か魔法使いだ」⁽¹⁰⁾と警官は叫ぶのである。「びっこのアリ」はそんな様子を楽しんでいた。

夜中歩き続けたメフメットは、ある家の戸を叩いた。家の主人と妻が「服に血がついている」と話す声が微かに聞こえただけで、その後は覚えていなかった。翌日、昼ごろに目を覚ますと、その家は友人スレイマンの家であることが分かった。「びっこのアリ」が警官を違う方に誘導して行ったから、安心して食事をしてよいとスレイマンが教えてくれた。

「びっこのアリ」は捜査隊を違う方に誘導して行ったが、捜査隊の中の「速足のムサ」の目はごまかせなかった。「速足のムサ」がメフメットの足跡を見つけてそちらに進もうとしたときに、「びっこのアリ」は銃を抜いた。「速足のムサ」もこれには驚き、「足跡はこちらにはない」と引き返した。その後、「びっこのアリ」は「速足のムサ」を連れてスレイマンの所に来て、メフメットの逃げる道に関して話し合った。警官はすぐに山狩りを開始するので、とにかく2～3日「つんぼのイスマエル」の製粉所に隠れるしかないとの結論がでて、食べ物を受け取って製粉所にメフメットは向かった。

製粉所に着くと、「つんぼのイスマエル」はメフメットに「不純な不信者め」、だれか助けてくれと叫ぶ。脅してやっとな静かになったが、彼によれば、(ロ)「はげのハムザ」(前述)がきてからの2年間、製粉所に麦も米も誰も製粉にこない。「アザミの平野」の農民は、全員が乞食になってしまった。こんな危険な目に農民を隔れたのは、「おまえのせいだ」と非難した。そんな雰囲気の中でメフメットが持ってきた食べ物を広げて、イスマエルに鳥肉をすすめると彼は飢えた狼のように食べ始めた。その後で、「おまえの父はいい男だった。おまえを歓迎するよ」と述べた。

「つんぼのイスマエル」の製粉所も、その日の午後には警官と「黒いイブラヒム」の団に包囲された。「出てこなければ、手投げ弾を投げる。木の下で死ぬ」と「黒いイブラヒム」が叫んだ。メフメットは、「黒いイブラヒム」だけは射殺できたけれども、その後警官の数は増えた。こんなとき彼を非難

した「つんぼのイスマエル」がメフメットに近づき、「諦めるな、俺が警官を朝までここに引き付けておく、だから夜のうちに製粉所に引き込んである小川沿いに逃げよ。雨も降っているし、神の与えた機会を無駄にするな」という⁽¹¹⁾。「ここには山賊が残した銃があるから、朝まで撃ってやる。村の農民に騙され、おまえさんを罵倒した。何も食べていなかったのだから、あんな酷いことを言ってしまう」と謝った。

その夜、製粉所からずっと応戦があった。朝方に手投げ弾が投げられると、応戦は終わった。メフメットの計略かと恐れながら警官が製粉所に入ると、メフメットの姿はなかった。空になった弾倉と自ら撃った弾の跡が首筋に残る「つんぼのイスマエル」の体が横たわっていたのである。こうしてメフメットは1日に3回警官に包囲されながら、3回とも逃げたという噂が、山から町に広まっていった。まさに、噂の伝播による聖者伝説の発生である。

前に述べた「褐色の駿馬」は、メフメットの将来の妻、セイレーンと関わって現れる。メフメットは「つんぼのイスマエル」の製粉所を逃れた後、谷を下ってバイバイ村にやってきた。そして、老オスマンの家にたどりつき、中州(後述)で隠れて静養し、セイレーンが病身のメフメットを世話するのである。「駿馬」を殺すように命じられた男(前述)は、「駿馬」を追ってメフメットの隠れ住む中州にきて、セイレーンと駿馬を見つけた。病身のメフメットを世話するセイレーンも駿馬まで後3歩と近づくけれども、そのたびに駿馬は中州のスイカ畑からどこかに消えてしまう。これを見て、「駿馬」は単なる馬ではなくて、「ジン」であるとその男は言う⁽¹²⁾。しかし、この中州でメフメットと「炎の中で一つになった」後に初めて、セイレーンは「1000年も前からの友達」のように、「駿馬に近づき、たてがみをつかむことができた」のである。

セイレーンは、メフメットに出会う前にバイバイ村の隅で「聖なる人」のように暮らしていた。セイレーンは別の村の、数世紀も溯ることができる由緒ある家系のイスラム法学者ムッラーの子供として生まれた。以前、彼女の家に孤児が居つき、その後この美男アジーズと美女セイレーンは愛し合うよ

うになったが、父のムッラーはこの男アジーズをバイバイ村に送り出し、彼女を別の男と結婚させようとした。彼女も村を出て、ついにバイバイ村でこの男を捜し出して二人の生活を始めた。ところが、(イ)アリ・サファ・ベイの兄には、トルコマン族の伝統と習慣に背をむけてどんな悪いことも非人間的なこともする3人の息子がいて、彼女のことを聞きつけて誘拐した。アジーズはこの3人を射殺し、来た警官を射殺した。彼は結局射殺され、二日間、見せしめのために死体が市内に放置されたのである。セイレーンも3カ月間投獄され、3カ月の刑を終えてからはバイバイ村でひっそりと生活していたのであった。

(2) 聖者メフメット伝説の伝播と土地篡奪者の反応

メフメットは「つんぼのイスマエル」の製粉所を逃れた後、谷を下ってバイバイ村にやってきた。「鉄砲をもった知らない人がいる」との子供の言葉で、人々が集まった。そんな中で老オスマンが、「痩せたメフメット」は困っている私たちを見捨てなかったと叫んだ。しかし、彼の服はボロボロだし、様子もおかしい。老オスマンの家についても、歯を食いしばっている。「きっと恐ろしい体験をしたのだらう」。村の人々も「彼は今、眠っている」と「噂」しあった。それでも、メフメットが「アザミの平野」に現れたという「噂」は村々に伝わった。人々は、ただ「鷹」とか「彼」としか呼ばなかったのだけれども⁽¹³⁾。

バイバイ村のゼイナルは、メフメットが「アザミの平野」に戻ったと(イ)アリ・サファ・ベイに伝えた。ゼイナル以外の村人は、「私たちにはメフメットが必要だから彼を救わねばならない」と、たとえ自分が殺されてもメフメットが村にいることは口にしなかったし、メフメットの秘密を守るために村の3人の男はゼイナルを殺したのである⁽¹⁴⁾。

メフメットが戻ったという「噂」は、「アザミの平野」に変化をもたらした。バイバイ村の人々を元気づけ、彼らに抵抗を鼓舞しているものは、メフメットであることを人々は知っていた⁽¹⁵⁾。第1に、農民たちは、土地篡奪者

(イ)アリ・サファ・ベイが以前に馬と引き換えに手にいれた土地に侵入を始めた。第2に、刈入れ前日に(イ)アリ・サファ・ベイの家が燃えたし、第3に、彼の家が襲われ馬が盗まれたのである。実際は、ゼイナルを殺した3人の男が畑に火をつけたのだが、畑が燃えるのを見て農民は喜んだ。

土地篡奪者(イ)アリ・サファ・ベイは、この変化を「農民の背後に誰かがいる」と感じた(土地篡奪者の対応1:恐怖)。息子呼んでパイパイ村に残っている家畜は全部殺せと、乱暴な命令をした。しかし、村からは情報役のゼイナルは来なくなり、メフメットのことを誰も伝えてこない。気になって自分からメフメットのことを村人たちに聞いてみた。メフメットが「黒いイブラヒム」(前述)を殺したと村人が話したが、その話しぶりからメフメットに「深い愛情と尊敬の念」をもっていると感じざるをえなかった。土地篡奪者(イ)アリ・サファ・ベイは、メフメットの脅迫観念、恐れにますます悩まされることになった。

もう一人の土地篡奪者(ロ)「はげのハムザ」は、アリ・サファ・ベイよりも動揺していた(土地篡奪者の対応2:狼狽)。(ロ)「はげのハムザ」は狼狽して涙ながらに「彼が殺しに来る」と叫び、「びつこのアリ」を訪れて、助かる手ではないのかと尋ねた。アリは、「フェル母さん」に頼んでメフメットに口添えしてもらおうことだという。二人が、「フェル母さん」の家の戸口で一晩中、命乞いをしたという「噂」は「アザミの平野」にすぐに広まった⁽¹⁶⁾。土地篡奪者(ロ)はげのハムザは町に行っても「彼が殺しに来る」と議員の所に行ったり、アンカラに電報を打ち救援を求めた。その後、市長に呼び出され、「おまえはこの町の空気をグメにするから村に戻れ」と命じられたほどである。

土地篡奪者(イ)アリフ・サイム・ベイは、相変わらずアクメザル村のイドリス・ベイと土地争いを続けていたし(前述)、ごく最近理由は明らかにされなかったが、義理の弟を鞭で殴り殺したばかりである。町の方ではアリフ・サイム・ベイに関して、変な「噂」がささやかれ始めていた。というのも、メフメットの脅迫観念に悩まされた土地篡奪者(イ)アリ・サファ・ベイが町に来て、警察、市長、議員を尋ねて回り、アンカラにも電報を打ったし、この他

にも、最近の農民の反抗的な態度や「痩せたメフメット」という人物の存在も、実はアリフ・サイム・ベイの差しがねではないかと触れ回った。要するに、トルコ革命が新段階に入り、トルコ共和国は地主でなく「農民を主人公とする」改革を、国会議員であり「国民的な英雄」であるアリフ・サイム・ベイを通じて導入し始めたのだと主張した⁽¹⁷⁾。

この「噂」がささやかれていたとき、土地篡奪者アリフ・サイム・ベイが町に来た。町の資産家の消沈ぶりと恐怖心を読み取り、「わが共和国は強力であり、指一本でメフメット千人を抑えられる」と説いた。新たな改革が彼を通じて導入され始めたのかを暗に尋ねる問いに対しては、「私は自分の金を農場に注ぎ込んでいる。農業で何か別の遊びを私がしていると思うのか」と答えた（ナショナル・エリートへのメフメット伝説への対応）。しかし、彼が町を去ったあとも、資産家の不安は募るばかりであった。こんな不安が広まる中で州知事がこの町にきて、役人と資産家を集めて、「二度とアンカラに電報を打ってはならない、アンカラは怒っている」と言い渡した。「諸君が山賊メフメットを逮捕するように期待する」と、政府と州知事の意向を伝えた。

(3) 土地篡奪者の対応：抑圧強化と聖者メフメット伝説の形成

老オスマンの家については3カ月、メフメットは村の北の沼地にある木々が茂り、メロン畑が広がる中州に移された。体と精神の傷を癒すためであったが、また、彼の状態を見せて農民を落胆させないためでもあった。メフメットは徐々に生気を取り戻し、村から食事などを運ぶセイレーンを見て微笑み始めた。

恐怖心に捕われた土地篡奪者アリ・サファ・ベイは、知事の意向を伝えられると、もはや誰からも援助が期待できなくなった。自分で武装集団を用意した。鉄砲をすぐに撃ちたがる若者を別の地方から集め、買い込んだ服を着せてカービン銃をもたせた。また、自宅には土のうを積み上げた。こうしてバイバイ村に行き、「10日以内に村を去れ、去らない場合にはこの村はカルバラ（シーア派の悲劇の地）になる」⁽¹⁸⁾と言い残した（本書第2章、上岡論文

参照)。

バイバイ村に緊張が高まるなかで、新たな事態が生じた。以前、村を捨ててサリチャン村に去った人々が、「隊列を組んで」村に戻ってきたのである。帰ってきた村人は恥ずかしげであったが、残っていた村人たちは大歓迎した。その数日後には、財産をすべて失って「不毛な土地」ナルリキシユラ村に追い出され、クルド族の「英雄」であった父をもつヨバゾグル・ハッサン(前述)も村に戻ってきた。「殺すなら殺せ、俺の血は祖父や父の所有していたこの土地に流す」と決意を示した。

土地篡奪者(i)アリ・サファ・ベイは、農民たちが自分の土地に侵入するのを見て、恐れ嘆きながら町に救援を求めに行った。事情を警察署長や検事、さらには、国会議員を通じてアンカラに伝えた。「農民たちが反乱を起こしました」と。すると、その日のうちに警察隊が村に送られ、行方不明者二人の殺害容疑者として、村に戻ってきたヨバゾグル・ハッサンと宗教指導者ホッジャが逮捕された。町に連行された二人は、馬の毛で作った黒いロープを首に結ばれて市内を引き回され、そのために死亡することになった。

しばらくしたある日の夜に、バイバイ村は銃声に包まれた。一団が銃を撃ちまくり、サリチャン村から戻った村人の娘3人を髪を引っ張って連れ去り、村に戻った人の馬を奪い牛をどこかに追いやった。次の日も3軒の家に放火した。3日目になると土地篡奪者(i)アリ・サファ・ベイは息子を村に送り、1週間以内に村を去れ、去らない時には風の日に村に火を放ち、出て来るもの全員を射殺すると通告した。村人の間に失望が広まった。

バイバイ村の人々の失望とは逆に、町には「瘦せたメフメット」が30人の集団を率いて、アナバルザ平野に現れたとの「噂」が広まった。こうしてチュクロバ平野にその「噂」が伝播する過程で、メフメットは184名を引き連れているとか、「噂」がさらに大きくなっていった。数だけでなく、「私が生きている限り、政府や残虐な地主や族長が貧しい人々を収奪することを許さない」と、「噂のメフメット」は語り始めた。さらに、「瘦せたメフメットはこういった」との句で始まる歌も人々の口に上り始めた⁽¹⁹⁾。まさに聖者伝説の

成熟である。

実際、ある朝、アナバルザの砦の突き出た岩の所で、数百人の警官が「瘦せたメフメット」を取り囲んでいると「噂」が伝わった。「瘦せたメフメット」は一人で一晩中持ちこたえ、地主ではないので警官を一人も殺さなかったという「噂」も流れた。朝になって一帯を鎮圧した警官が捜査すると、応戦したメフメットとは実は震えながら隠れている馬泥棒の一味であった⁽²⁰⁾。その後も、どこどこに「瘦せたメフメット」が現れたとの「噂」が入り、その度に警察署長は現場に急行した。もちろん、メフメットを逮捕できるはずがなく、逆に、警察署長がメフメットを追って動き回れば回るほど、メフメット伝説が形成されていった。

聖者伝説の確立である。ついに、警察署長は農民を誰でも彼でも鞭で打って、メフメットの居場所を聞きだそうとした。バイバイ村にも1週間留まって、村人の爪を剥がすなど拷問を加えて、メフメットの居所を聞こうとしたが、誰も答えなかった。

土地篡奪者(イ)アリ・サファ・ベイは、村に流入する水路を切って、住民に「村を去れ」と迫った。村人は市長、州知事に訴え、アンカラに電報を打って旱害の窮状を伝えたが、なにひとつ回答はなかった。バイバイ村の人たちは女たちを先頭にして、メフメットの隠れる中州のスイカ畑を越えて、町の郊外にある水源地に向かって行進していった。村人たちは、その貯水池に入り込み堰を切った。水は流れ始め、人々は勝利の念に酔った。しかし、旱上がった畑に水は吸い込まれ、なかなか村までは流れて行かなかった。

知事はこの事件を聞いて、村人をすぐに逮捕するように命じた。逮捕された村人は、町の警察署とモスクとの間の内庭に座らされた。検事は、「村を離れるものは釈放するが、そうでない者は15～20年の実刑に処す」と言い残した。爪を剥がされてもメフメットの居所を言わなかった者も、「バイバイ村を去る。何世紀も私たちの祖先から受け継いできた土地だが、そこを去るのも運命だ」と、釈放を求めた。翌朝、人々は重苦しい雰囲気の中でバイバイ村に戻った。

メフメットは徐々に回復し、セイレーンと「炎の中で一つになった」。けれども、「アブドが去って、ハムザが来る」、つまり、自分がアブドを殺したことが村の人々に災難と飢餓をもたらしたと悩んだ。「それなら、ハムザも殺せ」。「背は高く、黄金の美しい目と長い指」をもち、アクメザル村に住んでいたが裁判所に放火して山賊になったイドリス・ベイは言う。彼は、2日して戻るから、共に戦おうと言い残し、土地篡奪者(イ)アリ・サファ・ベイの家へ乗り込んだが、そこで殺された。このころには、老オスマンもメフメットを「自分の鷹」とは呼ばなくなった。

バイバイ村の人々が村を離れ始めた頃、「びっこのアリ」がメフメットを訪れた。アリは、土地篡奪者(ロ)「はげのハムザ」を哀れに思うと言う。彼の体にはもう恐怖が染み込んでしまったからである。と言うのも、メフメットがアナバルザ平野に来たというのを聞くと、「はげのハムザ」はアルダーの山中に隠れ、メフメットがチュクロバ平野に去ったと聞くと、初めて家にかえって三日間寝たという。しかし、三日間寝た後、彼は「チュクロバ平野に行くから馬の用意をしろ、警察署長や土地篡奪者(イ)アリ・サファ・ベイを助けに行く」と叫んだ。チュクロバ平野は、たとえ山賊には逃げることでできない罌であっても、「びっこのアリ」、おまえがいなくては「瘦せたメフメット、あの悪魔」に罌もかけられない。こう言って、土地篡奪者(ロ)「はげのハムザ」は、土地篡奪者(イ)アリ・サファ・ベイの所を訪れ、罌について話し合った。その結果、「びっこのアリ」彼自身が、あのろくでなし「メフメット」の後を追って、「瘦せたメフメット」に罌をかけることになったと、地主たちにその企てを伝えた。

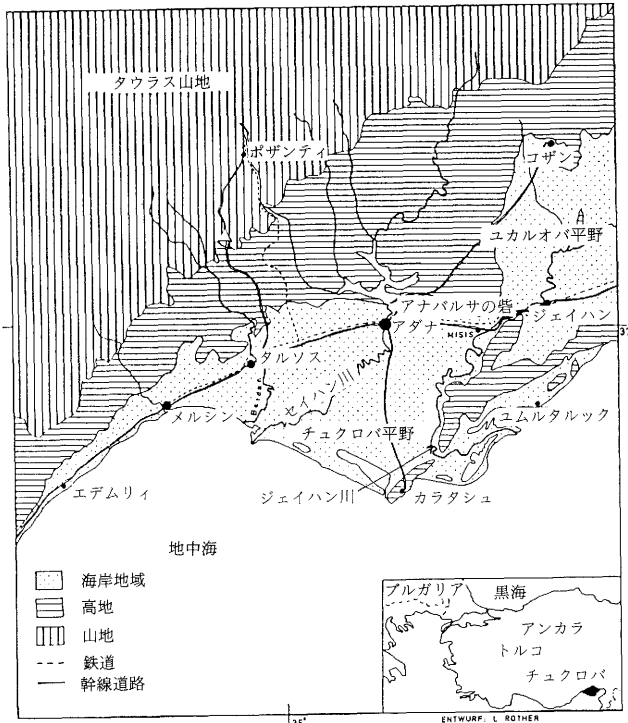
メフメットの顔は、今まで誰も見たこともないほど、厳しく岩のようにガッシリとし、目は鋼鉄のように輝きを見せた。メフメットは「褐色の駿馬」に乗り、老オスマンやセイレーンに会った後で、地主の殺害に向かった。土地篡奪者(イ)アリ・サファ・ベイをまず殺し、次に逃げ回る土地篡奪者(ロ)「はげのハムザ」を殺した。そして、殺した場所に「褐色の駿馬」を止め、ずっと動かなかつた。村人に知らされて、コログル村から「フェル母さん」が来

ると、メフメットも「駿馬」を母の方に進めた。メフメットの顔は明るくなり、母も微笑んだ。双方が村の方を眺め、また死体の所に戻った。「母さん、さよなら」と言うと、「痩せたメフメット」は「褐色の駿馬」をアルダーの山に向けると、黒い矢のように一瞬のうちに人々の視覚から消えたのである。

今日ではもはや、だれも「痩せたメフメット」のことは聞かないし、彼のことを伝えるものもない。ただ、「アザミの平野」の人々は、今でも耕作の季節が始まる直前には、三日三晩アザミを燃やすと言う。

小説、『アザミを燃やして』は、このように国家建設初期における土地篡奪、人々の土地と故郷への憧れ、社会不安の中の「聖者」願望について、また、英雄が犯罪者、義賊（山賊）であるという事例（第1章参照）について考える手がかりを小説ながら与えてくれるのである。

第1図 チュクロバ平野



(出所) Rother, L., *Gedanken zur Stadtentwicklung in der Çukurova (Türkei)*, Wiesbaden, 1972, S. 59.

〔注〕

(1) 第1巻 Yashar Kemal, *Memed, My Hawk*, trans. E. Roditi, London, Flamingo ed., 1984; トルコ語初版は *Ince Memed*, Istanbul, Remzi Kitabehi, 1958; 英語版初版は William Collins Sons & Co. Ltd., 1961.

第2巻 Yashar Kemal, *They Burn the Thisfles*, London, Writers and Readers Publishing Cooperative Society, 1982; トルコ語初版は *Ince Memed 2*, Istanbul, Ant Yayinlari, 1969; 英語版初版は William Collins Sons & Co. Ltd., 1972. 以下で本書を用いるときは『アザミを燃やして』と略。

第3巻 Yashar Kemal, *Ince Memed 3* (『瘦せたメフメット3』), Istanbul, Torosyayinlari, 1984.

第4巻 Yashar Kemal, *Ince Memed 4* (『瘦せたメフメット4』), Istanbul, Torosyayinlari, 1987.

(2) Austin, R. A., "Social Bandits and Other Heroic Criminals: Western Models of Resistance and Their Relevance for Africa," D. Crummy, ed., *Banditry, Rebellion and Social Protest in Africa*, London, James Curry, 1986, pp. 90-92.

(3) 地図のアナバルザには古い砦もある。またコザンの町などもあり、本稿のアナバルザ平野とはこの地域であると考えられる。また、以下の文では「瘦せたメフメット」「はげのハムザ」など一種のあだ名をつけて呼びあっているので、雰囲気を出すためにこれらの記述に従うことにした。

(4) 『アザミを燃やして』 35ページ。

(5) 同上書 145ページ。 (6) 同上書 169ページ。

(7) 同上書 177ページ。

(8) 同上書 75ページと233ページ、および本書第1章参照。

(9) 同上書 181ページ。 (10) 同上書 186ページ。

(11) 同上書 254ページ。 (12) 同上書 363ページ。

(13) 同上書 269ページ。 (14) 同上書 277ページ。

(15) 同上書 302ページ。 (16) 同上書 299ページ。

(17) 同上書 303ページ。

(18) 同上書 340ページ。カルバラーの悲劇を言う以上は、この村がシーア派教徒の村であると想定できるが、明示はされていない。シーア派の一派であるアラウィ派教徒の村であると想定したほうが良い。

(19) 同上書 369～370ページ。

(20) 同上書 371ページ。